

三者間グループ会話場面における話題の開始
—接触場面と母語場面における知人関係の会話の分析—

The topic opening in three-party group conversation:
An analysis of the conversations among the acquaintances in
Japanese contact and internal situations

大場 美和子 (千葉大学, 社会文化科学研究科)

Miwako OHBA (Chiba University,
Graduate School of Social Sciences and Humanities)

Abstract

This research aims to find out the different participating processes in two types of group situations, namely internal situations which involve three native speakers (NS) of Japanese, and contact situations which involve two NSs and one non-native speaker (NNS) of Japanese. The focus of the discussion is placed on the utterances that open the topics of conversation. The data comprises of 20 free-talking sessions among three acquaintances. 14 sessions were conversations in contact situations (low intermediate level 7, high intermediate level 7) while 8 were Japanese internal situations. Firstly, in both internal and contact situations, an analysis of the frequency of who opened a topic showed an imbalance of whom among the three participants opened the topic. Although the way the conversations were imbalanced was different from situation to situation, it is assumed that imbalanced distribution in topic openings is quite acceptable in three-party group conversations. Secondly, the analysis of the direction of utterances (for instance, whether the utterance was directed at one person or two people) and the types of utterances (whether they were presenting information or requesting information) showed that the different combinations of utterances in internal and contact situations, varied considerably. In the internal situations, two directional/information presenting utterances were found more often than the other utterances, and therefore it can be assumed that the participants pay attention to the two receivers in their conversations. In contact situations in contrast, the different combination of directions and types of utterances seemed to vary according to the difference of the participants' language ability. Secondly, topic openings between NS and NNS were higher than between the NS and NS in both low and high intermediate level. Thus it is assumed that the NSs are highly conscious of the existence of one NNS in the conversation, and therefore pay the NNS special attention. The conversation becomes like a two-party conversation despite the fact that there are actually three participants. However, in combination with the result of the frequency analysis, the responsibility of the two NSs is lightened in contact situations compared to the participant who took the leading part in the internal situations.

1. 研究の目的

本研究は、接触場面と母語場面の知人関係にある三者会話を分析対象とし、会話への参加のしかたの違いを比較分析することを目的としている。本稿では、話題を開始する発話に焦点をあてた分析結果を報告する。日常会話は、通常、話し手と聞き手の相互行為により作られていく。しかし、会話の参加者が3人の場合、1人の発話者に対し2人の受け手が存在し、発話を向ける方向が多様化する。つまり、話題によっては、2人の受け手のうち1人へのみ発話が向けられることもありうる。また、3人の参加者のうち1人の参加者が非母語話者（NNS）の場合、2人の母語話者（NS）がどのように1人のNNSとやりとりを行うのかという疑問も生じる。さらに、初対面の会話では、相手にに関する情報が殆どないため、出身や所属などの基本的な情報を互いに質問しあうことによって話題が開始されることが多い。しかし、知人関係の会話では、参加者間の基本的な情報は既に共有されており、初対面会話に比べると、質問によって話題を開始する必要性が低くなると考えられる。そこで、本研究では、接触場面と母語場面の知人関係の三者会話における話題を開始する発話に注目し、この話題を開始する発話がどのような種類の発話で、その発話が誰から誰に向けられているのかを比較分析し、3人の参加者が話題の開始にどのように関わっているのかを考察することを目的とする。

2. 先行研究

2.1 接触場面と言語管理理論

ネウストプニー（1995）は、学習者が実際に参加する「接触場面」を分析対象とし、そこで起こっているコミュニケーションの実態を明らかにすることにより、母語話者だけを教育目標とするのではなく、「接触場面」を基盤とした日本語教育を行うことの重要性を主張している。さらに、その接触場面において、参加者自身が実際に何を問題であると認定し、どう処理しているのかを、逸脱に対する参加者の留意と評価、その評価に対する調整という管理のプロセスにより、実証的に記述していくことの重要性を主張している。

2.2 接触場面における会話への参加の調整

村岡（2003）は、NNSの日常生活における様々な活動への参加の条件について考察している。そして、主として言葉によって成り立つコミュニケーション主体の活動の場合、NNSの言語能力が参加の条件の要因として関わるとしている。さらに、村岡（2003:247）は、この参加者間の言語能力の違いによって「対等な参加機会」が成立しにくくなることから、参加者間で会話を維持するために「言語的な役割調整」が行われるとしている。そして、「対等な参加機会」が成立しているかどうかは、参加者が自身や他の参加者の役割を適切であるとみなすかどうかによると指摘している。接触場面における三者会話では、村岡（2003）が指摘するように、言語能力の差によって「対等な参加機会」が成立しにくいだけでなく、1人の話し手に対し2人の聞き手が存在するという人数による役割の複雑さがあるといえる。よって、参加者は会話維持のために話題の開始においても調整を行い、さらにこの調整のありかたに対し、参加者自身がどのように評価するかによって、会話に対する評価も影響を受けると考えられる。

2.3 接触場面と母語場面の話題の開始

会話における話題導入の分析では、二者間の初対面会話を対象とした先行研究が多い（宇佐美・嶺田 1995, 宇佐美 1996, 佐々木 1998, 三牧 1999a, 1999b, 中井 2003）。これらによると、話題の開始の方法は大きく 2 つに分けられる。1 つは参加者の 1 人が質問形式で話題を導入する場合、もう 1 つは参加者同士が情報提供によって互いに話題を導入し合う場合である。さらに、接触場面では、NS が NNS に質問をすることによって話題を開始する傾向にあることが報告されている（佐々木 1998, 中井 2003）。また、接触場面では、NS が NNS に対して質問を行うことが NNS の会話への参加を支援することとなるとされている（Fan 1994, ファン 1999）。二者会話では、NNS を支援する NS は 1 名である。しかし、本研究で分析対象とする三者会話では NS は 2 名存在する。また、既に顔見知りである 3 人は、自己紹介などにより、出身や所属などの基本的な情報を質問によって行う必要性が低くなる。そこで、「対等な参加機会」（村岡 2003）が成立しにくいと考えられる接触場面と母語場面の三者会話において、3 人の参加者が話題をどれだけどのように開始し、接触場面では 2 人の NS がどのような発話で話題の開始に関わるのかを分析し、この結果について言語管理理論（ネウストプニー 1995）を参考に考察する。

3. データ

分析対象は、知人関係 3 人（女性）による 20 分程度の雑談である。接触場面（NNS, NS1, NS2）14 組、母語場面（NS1, NS2, NS3）8 組の会話を録画・録音により収集（2004 年 2 月～2006 年 1 月）した。また、後日、参加者全員に対して個別にフォローアップ・インタビュー（以下、FUI）を行った。

参加者は全て関東圏の大学に所属する学生である。3 人の参加者は授業やサークルなどで知り合っており、会話時は既に顔見知りである。よって、会話の開始に自己紹介などにより基本的な情報を質問する必要は殆どない。

接触場面における NNS については、学習歴、滞日歴、母語などには統制を加えず、調査時点で言語能力が中級レベルであることを条件とした。中級レベルの学習者は、日本語教育の現場では多数存在し、中級という枠組み自体にも幅がある。よって、中級レベルの前半と後半に分け、それぞれ 7 組ずつ、計 14 組の会話を収集した。表 1, 2 に NNS の属性を示す。以下、接触場面の会話データは、中級前半レベルの NNS が参加する場合は「接触場面 L1～L7」、中級後半レベルの NNS が参加する場合は「接触場面 H1～H7」、母語場面の会話データは「母語場面 1～8」と表す。

表 1：接触場面 L（中級前半レベルの NNS 1 名と NS 2 名）の会話データ

会話データ	国籍	母語	年齢
接触場面 L 1	タイ	タイ語	20 代前半
接触場面 L 2	中国	中国語	20 代後半
接触場面 L 3	デンマーク	デンマーク語	30 代前半
接触場面 L 4	カナダ	英語(best), 中国語(first)	10 代後半
接触場面 L 5	ドイツ	ドイツ語	20 代後半
接触場面 L 6	ブラジル	ポルトガル語	30 代前半
接触場面 L 7	アメリカ	中国語	10 代前半

表 2：接触場面 H（中級後半レベルの NNS 1 名と NS 2 名）の会話データ

会話データ	国籍	母語	年齢
接触場面 H 1	モンゴル	モンゴル語	20 代前半
接触場面 H 2	インドネシア	インドネシア語	20 代前半
接触場面 H 3	中国	中国語	20 代後半
接触場面 H 4	韓国	韓国語	30 代前半
接触場面 H 5	タイ	タイ語	20 代前半
接触場面 H 6	ロシア	ロシア語	10 代後半
接触場面 H 7	ベトナム	ベトナム語	20 代後半

4. 分析

南 (1972) の「談話」の 6 つの認定基準（ポーズ、連続性、参加者の一定性、communication 上の function の一定性、言葉の調子の一定性、話題の性格の一定性）を参考に、主に、内容の関連性と沈黙の有無から、各会話における話題を抽出した。そして、その話題を開始する最初の発話を分析対象とした。以下、4.1 において話題開始の頻度の分析結果、4.2 において話題を開始する発話の方向と種類の分析結果について述べる。

4.1 話題開始の頻度の分析

まず、3 人の参加者の話題開始の頻度を集計した。表 3, 4, 5 は、3 人の参加者の話題開始を頻度順（1 位、2 位、3 位）に並べた結果である。表 4（接触場面 L）と表 5（接触場面 H）では、NNS に「*」を付した。各参加者が話題を開始した割合（括弧内の百分率）は、各会話の総話題数を分母として計算した。例えば、表 3 の母語場面 1 の会話の場合、全 25 話題を、3 人の参加者がそれぞれ 13 話題（52.0%）、11 話題（44.0%）、1 話題（4.0%）を開始しており、会話における 96.0%の話題を 2 人の参加者が開始していたことがわかる。以下、母語場面、接触場面 L、接触場面 H の会話の特徴についてまとめる。

三者間グループ会話場面における話題の開始（大場）

表 3：母語場面における話題開始の頻度

会話データ	開始話題数			総話題数
	1 位	2 位	3 位	
母語場面 1	13(52.0%)	11(44.0%)	1(4.0%)	25(100%)
母語場面 2	19 (51.4%)	11 (29.7%)	7 (18.9%)	37(100%)
母語場面 3	17 (60.7%)	8 (28.6%)	3 (10.7%)	28(100%)
母語場面 4	16 (66.7%)	6 (25.0%)	2 (8.3%)	24(100%)
母語場面 5	16 (43.2%)	14 (37.8%)	7 (18.9%)	37(100%)
母語場面 6	16 (64.0%)	7 (28.0%)	2 (8.0%)	25(100%)
母語場面 7	7 (41.2%)	5 (29.4%)	5 (29.4%)	17(100%)
母語場面 8	14 (56.0%)	6 (24.0%)	5 (20.0%)	25(100%)

母語場面では、大きく 2 つの特徴が指摘できる。1 点目に、1 人の参加者が半数以上の話題を開始している会話が多い（母語場面 1：52.0%，母語場面 2：51.4%，母語場面 3：60.7%，母語場面 4：66.7%，母語場面 6：64.0%，母語場面 8：56.0%）点である。母語場面 5（43.2%）と母語場面 7（41.2%）は半数に至っていないが、ともに 40%以上を占めている。2 点目に、1 人の参加者の開始が他の参加者と比べて極端に少ない会話がある点である。具体的には、母語場面 1 が 4.0%，母語場面 3 が 10.7%，母語場面 4 が 8.3%，母語場面 6 が 8.0%で、10%台もしくはそれ以下にとどまっている。以上から、3 人の参加者の中に、少なくとも 1 人、話題の開始を中心的に担う参加者がいるということ、また、話題の開始において 1 人少ない参加者がいても許容されるということが考えられる。母語場面 1 では、NS1 が開始した話題は 1 つ（4.0%）である。FUI において「あまり話さなかった」と会話全体に対する印象を報告したが、特にそれを否定的に評価する報告はなかった。また、他の 2 人の参加者は、NS1 があまり話していないことを留意はしたが、特に否定的評価はしていなかったことを報告した。話題の開始の頻度において、3 人の参加者間に差が生じていたとしても、否定的な評価はされずに許容されるものと考えられる。

表 4：接触場面 L における話題開始の頻度

会話データ	開始話題数			総話題数
	1 位	2 位	3 位	
接触場面 L 1	18(47.4%)	12 (31.6%)	*8 (21.1%)	38 (100%)
接触場面 L 2	15 (46.9%)	*14 (43.8%)	3 (9.4%)	32 (100%)
接触場面 L 3	14 (53.8%)	8 (30.8%)	*4 (15.4%)	26 (100%)
接触場面 L 4	8 (34.8%)	* 8 (34.8%)	7 (30.4%)	23 (100%)
接触場面 L 5	12 (42.9%)	9 (32.1%)	*7 (25.0%)	28 (100%)
接触場面 L 6	14 (41.2%)	11 (32.4%)	*9 (26.5%)	34 (100%)
接触場面 L 7	11 (47.8%)	*11 (47.8%)	1 (4.3%)	23 (100%)

（接触場面 L 4 と L 7 の 1 位と 2 位は同数）

次に、中級前半 NNS の参加する接触場面 L の会話でも、話題開始の頻度は 3 人の参加者間で対等ではなく差が生じていた。しかし、母語場面で観察された 2 つの特徴は殆どみられない。まず、1 人の参加者が半数以上の話題を開始することは、接触場面 L 3 の会話を除いて観察されない。接触場面 L 3 では、会話終了の合図後も、2 人の NS が就職活動、バイト、新しいレストランについて話していたためである。FUI において、NNS は、もう会話は終わりであろうと思って聞いていたと報告した。

また、1 人の参加者の割合が 10%以下と少ないのは 2 つの会話だけであり（接触場面 L 2, L 7）、これはともに NS である。さらに、NNS に注目すると、NNS が 1 位になることはなく、2 位（接触場面 L 2, L 4, L 7）もしくは 3 位（接触場面 L 1, L 3, L 5, L 6）である。ただし、NNS が 3 位の場合でも、NNS の開始が 10%以下のように少なくはない。NNS が話題の開始を 1 人で中心的に担うこともないが、NNS の開始が極端に少ないわけでもないといえる。中級前半 NNS の参加する接触場面 L の会話では、話題開始の頻度が対等ではなく参加者間に差が生じている点は母語場面と共通しているが、参加者間の違いのありかたは母語場面とは異なるといえる。

表 5：接触場面 H における話題開始の頻度

会話データ	開始話題数			総話題数
	1 位	2 位	3 位	
接触場面 H 1	8 (40.0%)	* 6 (30.0%)	6 (30.0%)	20 (100%)
接触場面 H 2	13 (52.0%)	*10 (40.0%)	2 (8.0%)	25 (100%)
接触場面 H 3	*12 (60.0%)	6 (30.0%)	2 (10.0%)	20 (100%)
接触場面 H 4	*22 (68.8%)	8 (25.0%)	2 (6.3%)	32 (100%)
接触場面 H 5	*16 (80.0%)	3 (15.0%)	1 (5.0%)	20 (100%)
接触場面 H 6	* 9 (50.0%)	8 (44.4%)	1 (5.6%)	18 (100%)
接触場面 H 7	*13 (43.3%)	10 (33.3%)	7 (23.3%)	30 (100%)

(接触場面 H 1 の 2 位と 3 位は同数)

次に、中級後半 NNS の参加する接触場面 H の会話では、母語場面と類似の現象が観察される。まず、1 人の参加者が半数以上の話題を開始している（接触場面 H 2：52.0%、接触場面 H 3：60.0%、接触場面 H 4：68.8%、接触場面 H 5：80.0%、接触場面 H 6：50.0%）。その開始者は、接触場面 H 2 の会話以外、NNS である。接触場面 H 7 の会話も割合は 43.3%であるが、NNS が 1 位である。

次に、1 人の参加者の開始が極端に少ない会話も 5 つあり、これは全て NS である（接触場面 H 2：8.0%、接触場面 H 3：10.0%、接触場面 H 4：6.3%、接触場面 H 5：5.0%、接触場面 H 6：5.6%）。つまり、中級後半 NNS の参加する接触場面 H の会話では、話題開始の頻度において参加者間に差が生じている点、参加者間の差のありかたが母語場面と類似している点、また、NNS が話題の開始の多くを担っている点が指摘できる。

以上、接触場面と母語場面における話題開始の頻度の集計結果についてまとめる。まず、母語場面と接触場面ともに、話題の開始の頻度において3人の参加者間に差が生じることが観察された。ただし、この話題開始の頻度において三者間に差があることは、特に問題として留意されずに参加者間に許容されており、これが多人数会話の特徴ではないかと考えられる。母語場面と接触場面 H では頻度の割合の特徴に類似性が観察されたが、接触場面 L と接触場面 H では違いがみられた。接触場面 H における中級後半レベルの NNS は、話題の開始に多く関わり、話したい話題を自ら提出できる言語能力を持つのに対し、接触場面 L における中級前半レベルの NNS は、NNS 自身が話題開始の多くを担うことはなく、言語能力の不足が原因であると考えられる。

ただし、言語能力だけでは、会話に対する評価と一致しない場合がある。例えば、接触場面 L1 と L2 の会話においては、1 人の NS が会話の維持をはかるため、話題の開始を意識的に行ったこと、それについて「頑張った」「大変だった」という評価を FUI において報告した。しかし、接触場面 L2 の会話では、1 位の NS が 15 発話の開始、2 位の NNS が 14 発話の開始で、1 発話の違いしかない。頻度の集計結果では 1 人の NS が特に中心的に話題の開始に関与したとは考えられず、会話に対する評価との間にずれが生じる。

さらに、初対面二者間会話の先行研究では、NS による NNS への質問が多く（佐々木 1998, 中井 2003）、これが NNS に対する会話への参加支援であるとされていた（Fan1994, ファン 1999）。しかし、接触場面 H の会話では NNS 自身の開始が多くなっており、2 人の NS とのやりとりはどのようなになっているのか、発話の向けられた方向とその発話の種類の実分析が必要となる。よって、4.2 において、話題を開始する発話の方向と種類の分析を加え、頻度の分析結果と合わせて考察する。

4.2 話題を開始する発話の方向と種類の分析

話題を開始する発話の方向（一方向／二方向）と種類（情報提供／情報要求）の分析結果について述べる。発話の方向は、一方向か二方向かで分けた。一方向とは、2 人の受け手のうち 1 人に向けられた発話である（例(1)）。二方向とは、2 人の受け手に向けられた発話である（例(2)）。

例(1) 話題 25 【NNS→NS2】 NS2 ちゃんはどう ↑ （接触場面 H 2）

例(2) 話題 25 【NS2→NNS& NS1】 んー今日はちょっと寒いですか ↑ （接触場面 H 7）

発話の種類は、情報提供か情報要求かで分けた。情報提供は、参加者が自発的に陳述を行った場合で、自らの発話する機会を放棄して他の参加者に発話の義務が生じることのない場合を対象とした（例(3)）。

例(3) 話題 25 あ、あれいったよハーバーシティ（母語場面 1）

情報要求は、斎藤（1989）、南（1983）の質問文の定義を参考に、形式、文脈、音声から判断し、1 人の参加者が相手に発話の機会を与えることによって情報を要求した結果、要求された参加者は情報を提供する義務が生じた場合を対象とした（例(1)(2)）。情報要求に対し実際に情報提供を行ったかどうかは考慮しない。

以下、母語場面、接触場面 L、接触場面 H の特徴をまとめ、4.1 の頻度の分析結果と合わせ

て考察する。

4.2.1 母語場面の分析

表6は、母語場面の発話の方向と種類による分析結果である。括弧内の百分率は、各会話の総話題数を分母として計算した。表中、値の高い項目に下線を引いた。母語場面の特征としては、①二方向の開始が一方向より多く、②二方向の情報提供による開始が多い、という2点が指摘できる。

表6：母語場面の発話の方向（一方向／二方向）と種類（情報提供／情報要求）

会話データ:総話題数	発話の方向	発話の種類	
		情報提供	情報要求
母語場面 1:25	一方向: 9(36.0%)	2 (8.0%)	7(28.0%)
	<u>二方向:16(64.0%)</u>	<u>9(36.0%)</u>	7(28.0%)
母語場面 2:37	一方向: 6(16.2%)	3 (8.1%)	3(8.1%)
	<u>二方向:31(83.8%)</u>	<u>23(62.2%)</u>	8(21.6%)
母語場面 3:27	一方向: 4(14.8%)	0 (0.0%)	4(14.8%)
	<u>二方向:23(85.2%)</u>	<u>18(66.7%)</u>	5(18.5%)
母語場面 4:24	一方向:13(54.2%)	3 (12.5%)	<u>10(41.7%)</u>
	二方向:11(45.8%)	<u>8(33.3%)</u>	3(12.5%)
母語場面 5:37	一方向: 8(21.6%)	2 (5.4%)	6(16.2%)
	<u>二方向:29(78.4%)</u>	<u>25(67.6%)</u>	4(10.8%)
母語場面 6:25	一方向:13(52.0%)	2 (8.0%)	<u>11(44.0%)</u>
	二方向:12(48.0%)	<u>11(44.0%)</u>	1(4.0%)
母語場面 7:17	一方向: 3(17.6%)	1 (5.9%)	2(11.8%)
	<u>二方向:31(82.4%)</u>	<u>11(64.7%)</u>	3(17.6%)
母語場面 8:25	一方向:10(40.0%)	3 (12.0%)	7(28.0%)
	<u>二方向:15(60.0%)</u>	<u>8(32.0%)</u>	7(28.0%)

まず、①については、母語場面 1, 2, 3, 5, 7, 8 の 6 つの会話において、二方向の発話による開始のほうが一方向の発話より多い（母語場面 1: 64.0%, 母語場面 2: 83.8%, 母語場面 3: 85.2%, 母語場面 5: 78.4%, 母語場面 7: 82.4%, 母語場面 8: 60.0%）。残りの母語場面 4 と母語場面 6 の会話では一方向の方が多いが、割合をみると半々である（母語場面 4: 54.2%と 45.8%, 母語場面 6: 52.0%と 48.0%）。母語場面 4 は、久しぶりに会った 3 人が、互いの近況や進路について情報交換をしていた会話である。1 人ずつ情報要求を行なったため、発話が一方向に限定されたと考えられる。例(4) (5)では、NS1 が NS3 と NS2 に対し、1 人ずつ、将来教師になるかどうかについて情報要求を行った発話である。

例(4) 話題 20 【NS1→NS3】 えでも先生なる ↑（母語場面 4）

例(5) 話題 21 【NS1→NS2】 NS2 ちゃんやる ↑養護学校の先生（母語場面 4）

母語場面 6 は、NS3 の NS2 に対する一方向の情報要求が多くみられた。FUI で、各参加者

は、3人は学部も異なり、サークルで知り合った仲であるが、NS1とNS3の2人はNS2と比べてより親しく、三者間に親疎関係の違いがあることを報告した。このため会話が、NS1とNS3の2名とNS2との間でのやりとりとなる傾向が観察された。NS3がNS2に対して情報要求を行うことで、NS1はあえて自ら話題を提出する必要がなかったと考えられる(例(6)(7))。例(6)はNS2の近況について、例(7)はNS2の最近の活動と学科の関係について、NS3がNS2に対する一方向の情報要求を行った発話である。

例(6) 話題 17【NS3→NS2】NS2 何してんの↑（母語場面 6）

例(7) 話題 18【NS3→NS2】え↑って、学科と一関係ないの↑（母語場面 6）

次に、②全体として二方向の情報提供による開始が多い点について述べる。具体的には、母語場面 2, 3, 5, 7 の 4 つの会話において、二方向の情報提供が半数以上を占めている（母語場面 2：62.2%，母語場面 3：66.7%，母語場面 5：67.6%，母語場面 7：64.7%）。母語場面 1 と母語場面 8 は情報要求の値も高いが、二方向の情報提供の値が他の発話と比べて一番多い（母語場面 1：36.0%，母語場面 8：32.0%）。母語場面 4 と母語場面 6 は、一方向の情報要求も多いが（母語場面 4：41.7%，母語場面 6：44.0%）、同時に二方向の情報提供も同じような値が多い（母語場面 4：33.3%，母語場面 6：44.0%）。例(8)はNS1が次の時間の授業について、(9)はNS3がサークルの合宿の仕事について、2人の受け手に対して情報提供を行う発話で話題を開始している。

例(8) 話題 04【NS1→NS2&NS3】私次体育なんだ（母語場面 4）

例(9) 話題 12【NS3→NS1&NS2】あーあたしもお仕事しなきゃ（母語場面 6）

以上をまとめると、まず、発話の方向の分析から、2人の受け手に向けた話題の開始が多いことがわかる（母語場面 1, 2, 3, 5, 7, 8）。話題の開始頻度では、参加者間に差が生じていた。しかし、発話の方向を見ると、3人の会話であるということが参加者間に意識された話題の開始となっていると考えられる。次に、発話の種類の分析から、どの会話も二方向の情報提供による開始が多い。初対面会話とは異なり、知人関係の会話では参加者間で情報提供を行いながら会話を展開させていると考えられ、話題の開始の発話においてもその展開の要因が反映していたと考えられる。

4.2.2 中級前半 NNS の参加する接触場面 L の分析

表 7 は、接触場面 L の会話における発話の方向と種類による分析結果である。まず、総話題における話題の開始の発話を、発話の方向（一方向／二方向）で分け、さらに発話者とその受け手を NS と NNS で分類したうえで、発話の種類（情報提供／情報要求）を分けた。表中、値の高い項目に下線を引いた。括弧内の百分率は、各会話の総話題数を分母として計算した。接触場面 L の会話の特徴としては、まず、①主として一方向の情報要求が多い会話と、一方向の情報要求と二方向の情報提供の 2 つが多い会話とが観察される点が指摘できる。この結果、5 つの会話において、一方向の開始が半数以上となっている（接触場面 L 1：60.5%，接触場面 L 2：59.4%，接触場面 L 3：61.5%，接触場面 L 4：56.5%，接触場面 L 6：58.8%）。次に、② NS と NNS の間において話題が開始される傾向にある、という点も指摘できる。

表 7：接触場面 L の発話の方向（一方向／二方向）と種類（情報提供／情報要求）

会話データ :総話題数	発話の方向	発話の種類		
		NS と NNS	情報提供	情報要求
接触場面 L 1:38	一方向 :23(60.5%)	NS→NS	1(2.6%)	3(7.9%)
		NS→NNS	0(0.0%)	<u>16(42.1%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	3(7.9%)
	二方向 :15(39.5%)	NS→NS&NNS	8(21.1%)	2(5.3%)
		NNS→NS&NS	1(2.6%)	4(10.5%)
接触場面 L 2:32	一方向 :19(59.4%)	NS→NS	0(0.0%)	2(6.3%)
		NS→NNS	0(0.0%)	<u>13(40.6%)</u>
		NNS→NS	1(3.1%)	3(9.4%)
	二方向 :13(40.6%)	NS→NS&NNS	2(6.3%)	1(3.1%)
		NNS→NS&NS	6(18.8%)	4(12.5%)
接触場面 L 3:26	一方向 :16(61.5%)	NS→NS	<u>5(19.2%)</u>	<u>5(19.2%)</u>
		NS→NNS	1(3.8%)	<u>5(19.2%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
		NS→other	1(3.8%)	0(0.0%)
	二方向 : 9(34.6%)	NS→NS&NNS	<u>4(15.4%)</u>	1(3.8%)
接触場面 L 4:23	一方向 :13(56.5%)	NS→NS	2(8.7%)	0(0.0%)
		NS→NNS	4(17.4%)	<u>7(30.4%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
	二方向 :10(43.5%)	NS→NS&NNS	1(4.3%)	1(4.3%)
		NNS→NS&NS	<u>7(30.4%)</u>	1(4.3%)
接触場面 L 5:28	一方向 :13(46.4%)	NS→NS	1(3.6%)	1(3.6%)
		NS→NNS	3(10.7%)	<u>8(28.6%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
	二方向 :15(53.6%)	NS→NS&NNS	<u>7(25.0%)</u>	1(3.6%)
		NNS→NS&NS	<u>6(21.4%)</u>	1(3.6%)
接触場面 L 6:34	一方向 :20(58.8%)	NS→NS	3(8.8%)	4(11.8%)
		NS→NNS	1(2.9%)	<u>7(20.6%)</u>
		NNS→NS	2(5.9%)	3(8.8%)
	二方向 :14(41.2%)	NS→NS&NNS	<u>7(20.6%)</u>	3(8.8%)
		NNS→NS&NS	3(8.8%)	1(2.9%)
接触場面 L 7: 23	一方向 : 8(34.8%)	NS→NS	0(0.0%)	1(4.3%)
		NS→NNS	0(0.0%)	3(13.0%)
		NNS→NS	0(0.0%)	4(17.4%)
	二方向 :15(65.2%)	NS→NS&NNS	<u>6(26.1%)</u>	2(8.7%)
		NNS→NS&NS	<u>6(26.1%)</u>	1(4.3%)

(接触場面 L 3 の「NS→other」は隣室のノックに対して返答をした発話)

三者間グループ会話場面における話題の開始（大場）

まず、主として一方向の情報要求が多い会話（接触場面 L 1, L 2）について述べる。接触場面 L 1 と L 2 の会話は、NS から NNS に向けられた一方向の情報要求が多い（接触場面 L 1: 42.1%, 接触場面 L 2: 40.6%）。参加者同士の基本的な情報は既に共有されているのにもかかわらず、二者間の初対面会話のような現象が観察される。NS の情報要求が、NNS の会話への参加の支援（Fan1994, ファン 1999）となっていると考えられる。FUI でも、接触場面 L 1 では NS が、接触場面 L 2 では NS2 が意識的に話題を開始するため、例(10)(11)のように、NNS に対して情報要求を行っていたことを報告している。4.1 の開始の頻度の分析では、接触場面 L 2 の会話において、1 人の NS と NNS の開始頻度に 1 発話の違いしか観察されないものの、NS が会話維持のために話題の開始を意識的行ったことやその評価が FUI で報告され、頻度の分析結果と参加者の会話に対する評価にずれが生じることを指摘した。しかし、発話の方向と種類をみると、NNS に対する NS の情報要求が多く観察され、FUI での NS の話題開始に関する報告と一致する。

例(10) 話題 26 【NS2→NNS】これ髪の毛は染めてるの↑（接触場面 L 1）

例(11) 話題 11 【NS2→NNS】野菜でさー、食べられないやつとかある↑（接触場面 L 2）

次に、一方向の情報要求と二方向の情報提供の 2 つが多い会話（接触場面 L 3, L 4, L 5, L 6, L 7）について述べる。まず、接触場面 L 4, L 5, L 6, L 7 は、NS から NNS に向けられた一方向の情報要求とともに、二方向の情報提供の発話も多い。この二方向の情報提供には【NS→NNS】（接触場面 L 3, L 5, L 6, L 7）と【NNS→NS】（接触場面 L 4, L 5, L 7）の両方が観察される。特に接触場面 L 7 は二方向の情報提供が多く、NS が発話者の場合（例(12)）と NNS が発話者の場合（例(13)）の両方で 26.1%となっている。母語場面のように二方向の情報提供により話題が開始されていたと考えられる。例(12)は NS1 が自身の午前中の授業について、例(13)は NNS が日米の大学の先生の違いに関する話題を開始した発話である。

例(12) 話題 02 【NS1→NNS&NS2】今日はね一朝 1 限がゼミで一ずーっと 2 限が心理だったの（接触場面 L 7）

例(13) 話題 07 【NNS→NS1&NS2】日本の先生はだいたい同じ（接触場面 L 7）

また、接触場面 L 3 は NS 間の情報提供と情報要求、NNS に向けた情報要求がそれぞれ 5 発話（19.2%）である。これは前述の通り、接触場面 L 3 では会話終了の合図後に 2 人の NS 間で話題が展開したことが影響している（例(14)(15)）。また、NNS が持参したマンションの書類に関して NS が NNS に事実関係の確認を情報要求によって行っていることも影響している（例(16)）。例(14)は NS1 のバイト、例(15)は大学の近所のレストラン（MOGMOG）、例(16)は大学とマンションの場所に関する話題を開始する発話である。

例(14) 話題 21 【NS2→NS1】え↑夜中バイトしてんの↑（接触場面 L 3）

例(15) 話題 22 【NS1→NS2】そういえばさーMOGMOG さーなんかリトルのまんまじゃん（接触場面 L 3）

例(16) 話題 06 【NS1→NNS】だって NNS さー確かにまー早稲田の方がいいだろうけどー学校にそんなに近くななくてもいいんじゃない↑（接触場面 L 3）

以上のように、接触場面 L の会話では、情報要求によって話題を開始するという接触場面の NS による支援の特徴と、二方向の情報提供によって話題を開始するという多人数会話の特徴、という 2 つの現象が混在して観察される。

最後に、② NS と NNS の間において話題が開始される傾向にある点について述べる。NS から NS に向けた一方向の開始は、接触場面 L 3 と接触場面 L 6 をのぞき、10% 台かそれ以下という低い値となっている。接触場面 L 3 は、前述の通り、会話終了合図後の NNS の会話終了に対する調整が行われた結果が影響している。接触場面 L 6 では、NS2 が NNS の国の滞在経験があるため、NNS の国に対する情報量の違いが 2 人の NS 間にある。このため、NS2 が NS1 に情報提供や情報要求による確認を行った結果（例(17)）、NS 間の発話の値が高くなったと考えられる。接触場面 L の会話では、全体としては、発話の方向の分析から、三者会話であっても、1 人の NNS の存在が意識された NS と NNS の間において話題が開始される現象が観察されるといえる。

例(17) 話題 22 【NS2→NS1】なんか—feio っていう言葉があつてなんでも feio
(接触場面 L 6)

4.2.3 中級後半 NNS の参加する接触場面 H の分析

表 8 は、接触場面 H の会話における発話の方向と種類による分類結果である。接触場面 H の特徴としては、①二方向の開始が半数以上を占めている、②全体として一貫した発話の種類の特徴がみえにくい、③NS と NNS の間において話題が開始される傾向にある、という 3 点が指摘できる。

まず、①二方向の発話による開始が半数以上を占めている点について述べる。接触場面 H では、接触場面 H 1 以外の会話で、二方向の発話による開始が半数以上を占めている（接触場面 H 2 : 56.0%, 接触場面 H 3 : 55.0%, 接触場面 H 4 : 78.8%, 接触場面 H 5 : 55.0%, 接触場面 H 6 : 61.0%, 接触場面 H 7 : 90.0%）。接触場面 H 1 は、NS の NNS に対する情報要求が多い（45.0%）。しかし、この情報要求の発話内容を見ると、各自の旅行の経験（例(18)）やモンゴルと日本の教育制度（例(19)）についてである。NNS に対する会話参加の支援であると考えられるが、初対面会話のような参加者の基本的情報に関する話題とは異なった内容である。

例(18) 話題 04 【NS1→NNS】なんか時間ゆったりしてません↑でしたフランスとか
(接触場面 H 1)

例(19) 話題 14 【NS2→NNS】えもう殆どの人が大学行くんですか↑モンゴルで田舎の一人
(接触場面 H 1)

次に、②全体としての一貫した発話の種類の特徴がみえにくい点について述べる。接触場面 H 2～H 7 では、以下のように多様な発話の傾向が観察され、母語場面や接触場面 L の会話のように、全体としての特徴がみえにくい。接触場面 H 2 は、【NS→NNS】【NNS→NS】の情報要求（ともに 20.0%）と【NS→NS&NNS】の情報提供（28.0%）が多い。接触場面 H 3 は、【NS→NNS】の情報要求（30.0%）と NS と NNS による二方向の情報提供と要求（ともに 25.0%）が多い。接触場面 H 4 は、NS と NNS による二方向の情報提供（25.0%, 40.6%）が多く、【NNS→NS】の情報要求が続いている（15.6%）。接触場面 H 5 は、【NNS→NS】の情報要求と NNS による二方向の情報提供（ともに 35.0%）が多い。接触場面 H 6 は、【NS→NNS】の情報要求と（27.8%）NNS による二方向の情報要求（33.3%）が多い。接触場面 H 7 は、NS と NNS に

三者間グループ会話場面における話題の開始（大場）

よる二方向の情報提供（33.3%，43.3%）が多い。つまり，接触場面 H の会話は，一方向と二方向，情報提供と情報要求，【NS→NNS】と【NNS→NS】という様々な組み合わせの発話が混在しており，逆にこれが接触場面 H の会話の特徴であると考えられる。話題開始の頻度では，5つの会話においてNNSが1位で，残りの2つの会話も高い頻度であった。単純にNNSの話題開始の発話の頻度が高いだけではなく，発話の種類や方向も多様になっているといえる。

表 8：接触場面 H の発話の方向（一方向／二方向）と種類（情報提供／情報要求）

会話データ : 総話題数	発話の方向	発話の種類		
		NS と NNS	情報提供	情報要求
接触場面 H 1:38	一方向 : 14(70.5%)	NS→NS	1(5.0%)	3(15.0%)
		NS→NNS	0(0.0%)	<u>9(45.0%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	1(5.0%)
	二方向 : 6(30.0%)	NS→NS&NNS	0(0.0%)	1(5.0%)
		NNS→NS&NS	4(20.0%)	1(5.0%)
接触場面 H 2:32	一方向 : 11(44.0%)	NS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
		NS→NNS	1(4.0%)	<u>5(20.0%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	<u>5(20.0%)</u>
	二方向 : 14(56.0%)	NS→NS&NNS	<u>7(28.0%)</u>	2(8.0%)
		NNS→NS&NS	4(16.0%)	1(4.0%)
接触場面 H 3:26	一方向 : 9(45.0%)	NS→NS	0(0.0%)	2(10.0%)
		NS→NNS	0(0.0%)	<u>6(30.0%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	1(5.0%)
	二方向 : 11(55.6%)	NS→NS&NNS	1(5.0%)	<u>5(25.0%)</u>
		NNS→NS&NS	<u>5(25.0%)</u>	0(0.0%)
接触場面 H 4:23	一方向 : 7(21.9%)	NS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
		NS→NNS	0(0.0%)	1(3.1%)
		NNS→NS	1(3.1%)	<u>5(15.6%)</u>
	二方向 : 25(78.1%)	NS→NS&NNS	<u>8(25.0%)</u>	1(3.1%)
		NNS→NS&NS	<u>13(40.6%)</u>	3(9.4%)
接触場面 H 5:28	一方向 : 9(45.0%)	NS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
		NS→NNS	0(0.0%)	2(10.0%)
		NNS→NS	0(0.0%)	<u>7(35.0%)</u>
	二方向 : 11(55.0%)	NS→NS&NNS	1(5.0%)	1(5.0%)
		NNS→NS&NS	<u>7(35.0%)</u>	2(10.0%)
接触場面 H 6:34	一方向 : 7(38.9%)	NS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
		NS→NNS	2(11.1%)	<u>5(27.8%)</u>
		NNS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
	二方向 : 11(61.1%)	NS→NS&NNS	1(5.6%)	1(5.6%)
		NNS→NS&NS	3(16.7%)	<u>6(33.3%)</u>

接触場面 H 7:23	一方向 : 3(10.0%)	NS→NS	1(3.3%)	1(3.3%)
		NS→NNS	0(0.0%)	1(3.3%)
		NNS→NS	0(0.0%)	0(0.0%)
	二方向 :27(90.0%)	NS→NS&NNS	<u>10(33.3%)</u>	4(13.3%)
		NNS→NS&NS	<u>13(43.3%)</u>	0(0.0%)

最後に、③ NS と NNS の間において話題が開始される傾向にある点について述べる。接触場面 H でも、接触場面 L と同じく、NS 間の一方向の開始は、接触場面 H 1 をのぞき、10% 台かそれ以下という低い値となっている。また、NS からの支援と考えられる情報要求がなかったわけではない（接触場面 H 1, H 2, H 3, H 6）。以上から、接触場面 H の会話でも、1 人の NNS の存在が参加者間に意識され、NS と NNS の間において多くの話題が開始されていたと考えられる。

5. 考察

4.1 と 4.2 における、話題を開始する発話の頻度、方向、種類の分析結果の考察について 4 点述べる。第 1 に、頻度の分析から、母語場面と接触場面にほぼ共通して、3 人の参加者の話題開始の頻度において差が生じていた。ただし、この 3 人の頻度の違いのありかたは、母語場面、接触場面 L、接触場面 H において異なっていた。また、話題開始の頻度に差があることを特に否定的に評価する報告はなかった。話題開始の頻度において参加者間に差が生じることが許容される点は全ての場面で共通しており、これが三者会話の特徴であると考えられる。

2 点目として、発話の種類と方向の組み合わせが 3 つの場面では異なる点が指摘できる。母語場面では、二方向の情報提供による開始が全ての会話において多かった。一方、接触場面においては、接触場面 L の会話では二種類の発話の組み合わせ、接触場面 H の会話では多様な発話の組み合わせが観察された。このように、発話の組み合わせが混在しているのが接触場面の特徴であると考えられる。ただし、混在のありかたが接触場面 L と接触場面 H の会話では異なっており、これが言語能力の違いを反映していると考えられる。

3 点目として、接触場面では、NS と NNS の間で話題が開始されることが多い点が指摘できる。接触場面 L 3 を除き、接触場面 L と接触場面 H の会話に共通して、NS 間の話題の開始は少ない。接触場面では、三者会話であっても、NS と NNS という対立が顕在化し、それが話題の開始にも影響していると考えられる。FUI においても、接触場面の参加者は、NNS について話そうと思っていたことを報告している。期待通りの話題について話せたということが会話に対する肯定的評価につながるのではないかと考えられる。

4 点目として、接触場面における 2 人の NS の話題開始の負担は少ない点が指摘できる。接触場面において 1 人の NS が半数以上の話題を開始しているのは、接触場面 L 3 と接触場面 H 2 の会話だけである。接触場面 L 3 は、4.1 で述べたように、会話終了後の NS 間のやりとりが影響している。接触場面 H 2 は、FUI において NS1 が NNS に日本のことを知ってもらおうと意識的に話したことを報告している。NS1 が接触場面であることを強く意識したことが影響したと考えられる。接触場面では、この 2 つの会話以外、NS 自身が半数以上の話題を開始することはない。発話の方向の分析から NS と NNS という所与の条件が参加者間に意識されていたと

考えられる点を指摘した。しかし、発話の頻度の分析から、1 人の NS の発話の頻度の割合は、母語場面で中心的に話題を開始する人ほどの高い割合となることはない。また、2 人の NS に話題開始の頻度に差があっても、母語場面において同様に 3 人の参加者間における差は観察されるため、参加者には問題として留意されなかったと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、接触場面（中級前半レベルと中級後半レベルの NNS）と母語場面の三者会話における話題を開始する発話に注目し、発話の頻度、方向、種類の 3 つの分析を行った。今後の課題としては、今回の分析で抽出した各話題について、その開始部や終了部における発話の連鎖に注目し、3 人のやりとりを詳しく分析することがあげられる。これにより、今回の分析結果と合わせ、3 人の参加者による接触場面と母語場面の会話への参加のしかたの違いを、実証的に明らかにしたいと考える。

文字化の規則

ー	「ー」の前の音節が長く延ばされていることを示す
↑	上昇イントネーション
、	ごく短いポーズ

参考文献

- 斎藤里美（1989）「日本語教育における疑問文・質問文ーコミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題」『日本語学』8 巻 8 号 明治書院 pp.41-56
- 佐々木由美（1998）「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話ー同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間教育』12 号 pp.110-127
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美(1995)「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン: 初対面二者間の会話分析より」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2 名古屋学院大学留学生別科（日本研究プログラム） pp.130-145
- 宇佐美まゆみ(1996)「初対面二者間会話における話題導入頻度と対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について」『ことば』17 号 現代日本語研究会 pp.44-57
- 南不二男(1972)「日常会話の構造ーとくにその単位について」『言語』1 巻 2 号 大修館書店 pp.108-115
- 南不二男(1983)「第 2 章 質問文の構造」水谷静夫編『朝倉日本語講座 4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店 pp.39-74
- 三牧陽子(1999a)「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性ー異学年大学生間の会話の分析ー」吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会編『日本語の地平線 吉田弥壽夫先生古希記念論集』くろしお出版 pp.363-376
- 三牧陽子(1999b)「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジーー大学生会話の分析ー」『日本語教育』103 号 日本語教育学会 pp.49-58
- 村岡英裕（2003）「アクティビティと学習者の参加ー接触場面にもとづく日本語教育アプローチ

接触場面と言語管理の学際的研究

のためにー」宮崎里司／ヘレン・マリOTT編『接触場面と日本語教育 ネウスト
プニーのインパクト』明治書院 pp.245-259

中井陽子(2003)「話題開始部で用いられる質問表現ー日本語母語話者同士および母語話者／非
母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』第2号 早稲田大学大
学院日本語教育研究科 pp.37-54

ネウストプニー, J. V. (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店

ファン, サウクエン (1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2
巻1号 社会言語科学会 pp.37-48

Fan, S. K.C. (1994) Contact Situations and Language Management. *Multilingua*, 13-3, pp.237-252.